



大谷 美子

## 私の善知識

善知識にあうことも  
おしることもまたかたし  
よくきくこともかたければ  
信ずることもなおかたし

これは親鸞聖人がおつくりになったご和讃です。善知識とは迷いの中にある私を仏道の入口に導いてくれる人のことを言います。親鸞聖人にとって法然聖人はまさにそのような人でした。しかし、このご和讃にあるように、そういう人に会うことはなかなか難しいことです。なによりも、自分が自我という堅い殻にしがみついているうちは、その人が側にいても気付くことはありません。

しかし、自分の人生を振り返り、ご縁のあった一人一人を思わせていただくと、ありがたいことに、私をここまで導いてくださった方がたくさんいることに気付かされます。私事で恐縮ですが、少しその話をさせていただきます。

私は福井のお寺の次女として生まれ、小さいときから病気がちで、親に心配ばかりかけ、兄弟には泣かされてばかりの弱々しい子供でした。姉が活発ではっきり物を言う一方で、私の方が長女と間違えられるほど、おっとりとした性格でした。本が好きで読み出したら止まらず、廊下であろうと蔵の中であろうと、座り込んだまま読み終わるまでいたのを覚えてます。

そんな頃に、宮沢賢治の本に夢中になりました。「銀河鉄道」の夜、「セロ弾きのゴーシュ」、「注文の多い料理店」、「よ

だかの星」、「ふたごの星」、「風の又三郎」、「グスコブドリの伝記」、今も次々と思いつきます。そして何と言つても「雨二毛負ケズ」の詩に幼いながらも衝撃を受けました。一生懸命暗記したものです。

また小学六年生の頃だったと思います。島倉千代子さんが歌う「しんらんさま」のレコードが手に入り、不思議な歌に興味を持ち、何度も聞いていました。ちなみにB面は真理ヨシコさんの「光の中に」だったと思います。まだお寺の仕事も何も分らなかった頃でしたが、なんとなく仏教的なものに惹かれていた変わった子供だったのだと思います。

中、高とは周りの子供と変わりなく、部活や嫌々勉強に明けられてはいたものの、自分が嫌で嫌で仕方がなかった時期もありました。そして、お寺に生まれたことを恨んだ時期もありました。勉強もそこに自分だけを見つめることが多かったような気がします。

そのうち、自分ばかりではなく、他人のことも冷静に観察できるようになってきたからでしょうか、自分との関係も考えられるようになり、ようやく自分一人では生きていけないことに気づかされました。

その時、今まで私に特に教訓めいたことも言ったこともないし、ひどく怒ったこともない母の存在がとても大きく感じられたのです。

母はいつも忙しくしていました。家族の世話はもとより、お寺の掃除、境内の草引き、門徒さんとの対応、住職の秘書役までこなし、法事の時には精進料理で門徒さんをもてなし、文句も言わず、ひたむきに仕事をこなしていました。

そして、なによりもいつも笑顔だったのです。その後ろ姿を意識したとき、生きるための素晴らしいお手本がこんな近くにあったのかと、はっと息をのみました。そして、私もこんなふうになれたらと密かに心に決めたのです。

縁あつて、二姫路に嫁ぎ、何も分からず、とまどいながら、周りの方々のお教えをいただいて、ようやくここまでこれたのです。つらいときや、悲しいときに「雨二毛負ケズ」の詩や幼い頃の仏教讃歌だったり、いつも母の笑顔を思いながら頑張ってきた感じが致します。

これを善知識というにはあまりにも稚拙なかもしれませんが、これからもまだまだいろんな方と出会い、お教えをいただくことを楽しみに生きようと思えます。

## 「伽藍安穩興正法」冊子の刊行について

本徳寺を世人に説明するときにもいつか焦点が決まらないストレスを感じる。その理由に、このお寺の多様な歴史の展開がある。かつて本徳寺は蓮如教団の西の拠点として存在理由があつた。近世には、宗門における播州の中本寺として本末行政の役割をはたした。近代には別格別院となつて播州の真宗信徒の崇敬を集めた。そして、戦後は伝統宗門の解体とともに、本徳寺は地域の真宗の歴史の伝統を持つ由緒寺院とされている。このように時代とともに本徳寺は生まれ変わり死に変わりしてきた。ここに焦点が定まらない理由の一つがある。

もう一つの理由は、自らをことさら世間に説明するということ自体、お寺にとつては未経験だからである。従来のお寺は、本末制度下にせよ、寺檀制度下にせよ、ことさら自らの存在理由を説明する必要はなかった。その体制のなかで決められた役割を果たせばそれでよかったのである。

戦後、日本社会は過激に変わった。日本社会を覆っていた古い文化や習慣そして暗黙のルールなどの強制力は弱められ、あるいは取り除かれ、極めて無責任な自由と平等の時空間に未熟な個が放り出された時代である。このような混乱の時代と社会において、今、お寺は自らの社会的役割を明確にして、その存在理由を世間に説明する責任を求められている。

このような背景を認識して、本徳寺の果たしてきた歴史的業績や文化財としての存在意義をわかりやすく一般社会に説明するための試みの一つとして、「伽藍安穩興正法」の刊行を企画したものである。出来るだけ多くの方々に読んでいただきたい。

(眞宗文化研究室)

